

銃 砲 史 研 究

第 276 号

徳丸原に於ける洋式演練の評価

所 莊 吉

幕末留学生 澤 太郎左衛門の軌跡(二) 霜 礼次郎

平成8年6月

銃 砲 史 学 会 編

徳丸原に於ける洋式演練の評価

所 莊 吉

天保十二年五月七日を以て日本の兵制改革の端緒とする大方の見方は、この日に行われた徳丸原の演練が成功裏に終えたと見ることに由る。確かにその後にはける西洋兵学の着実な展開を見れば、秋帆が投じたインパクトは確実に波紋を拡げ、その大きな潮流が兵制の近代化を促したことを否定する者はいない。その意味から云えば、徳丸原の演練は成功であったと評価されるのも当然である。

しかし、秋帆が天保十一年九月に長崎奉行田口加賀守に提出した上申書を以て、西洋兵学導入による軍制の改革を提言とするのは、少し買いかぶりの感がないでもない。これまでの研究者から天保上書とも称せられてきた秋帆の提言は、多くの伝写本が残されているほか、勝海舟の『陸軍歴史』上巻に収められているため容易に利用できる。

この上書の前文は、旧制の兵備に頼る清国が英国軍隊に敗北した阿片戦争を例に引き、近代的な火術の優秀さを説くためとはいえ、秋帆の性格からか筆が走り、伝統的な和流砲術をして、西洋では数百年前に廃棄した遅鈍の技であり、荒唐無稽の華法を以て門戸を立て互いに競い合っていると酷評して、「本邦玉砲燂の類も種々秘法と仕り候業など御座候えども、とてもボンペンなどの烈しき業に及び候義はこれ無く哉と存じ奉り候。余は御賢察ありなさるべく候」と高島流砲術の優位性を誇示するあまり、後段になると長崎の地役人は結構な役料を与えられているながら安逸な日常を過ごしていると非難し、彼らに武芸の稽古を励むよう仰せ付けて欲しいと訴えている。

然るところ地役人共の内には、結構御役料頂戴仕り候者ども少なからず候間、右の者へ平日武芸など相励み候よう仰せ付け置かれ、非常の節は夫々手割りに割り込み候よう御座候はゞ、御奉行所御手伝いもかなりに

人数相備え申すべく哉、憚りながら篤と御檢察在りなされ候よう仕り度く存じ奉り候。

(塩田順菴『海防彙議補』卷十三)

これでは井上左太夫ならずとも和流砲術家の反発を招くのも無理はないし、同役の長崎町役人から余計なお節介だと心よからず思われたとしても不思議ではない。

その結びとして、和流砲術を廃して高島流を採用すること、併せてモルチール筒を購入して欲しいと述べているが、実演のため江戸に呼ばれることまでは望んでいなかった。

砲術の儀は護国第一の武備に御座候間、憚りながら御大方高貴の御方並びに御火砲家の御明鑑を以て理非を御取り捨て遊ばしなされ、普く天下の火砲一変仕る実技に相定め候よう御座候はば、吾が邦の武威いよいよ光揚仕り、御治世永久の吉瑞と千万有り難く存じ奉り候。何卒モルチール筒並びに近來發明の心得もこれ有り候に付き、これらはきつと御備えにも相成り申すべく存じ奉り候間、江戸表御備えなどに成し置かれ候ては、如何あるべく御座候や、且つまた諸国海岸の御備え向き、長崎表御両家御備えの様子にてほば推量仕り、満腹の愚意御座候えども余り恐れ入り存じ奉り候間、これのみにて黙止仕り候、憚りながらもし御受用下し置かれ候はば望外に感佩奉り候。

(塩田順菴『海防彙議補』卷十三)

秋帆と昵懇であった長崎奉行田口甲斐守を経由した秋帆の上書は、大目付鳥居耀蔵が老中の諮問に応えて、天保一一年一二月に「火砲は元來蛮国伝来の器に候えば、追々發明の術これある哉も計りがたく候に付き、万一諸家家来えのみ伝法相成り候ようにも如何御座候間、専門の義に付き、井上左太夫・田付四郎兵衛そのほか諸組与力のうち、砲術師範仕り候者え見分仰せ付けられ、格別便利の器に候はゞ、銘々家伝のほか修行も仕り候てしかるべき哉に付き、何れ右器は御取寄せの方と存じ奉り候」と答申したことから、徳丸原の演練が実現したのである。このように秋帆を江戸に招いたのは開明派のバックアップに依るのでなく、鳥居耀蔵の意見に従ったものであるとはいえ、彼の姿勢はもともと「火砲の利を頼み纔の地役人を指揮仕り候くらの義を一方の御備えと存

じ候義は、元微賤のもの福小の識見より出るところにて一切御採用には相成らず候」と、洋式火術が優れていたとしても既存の和流砲術家の参考にする方針であって、最初から秋帆を召し抱える考えはなかったというか、文面から見られるように秋帆に好意は持っていなかったようだ。

この鳥井の意を汲んでか、演習の見分役を務めた井上左太夫が直後に提出した報告書では、井上流砲術との比較に絞った見方であるため評価はどうしても厳しくなるものの、それでも個人攻撃にまでは至っていなかった。それが翌六月の、「この度徳丸原に於いて長崎町年寄高島四郎太夫火術試し打ち仰せ付けられ候ところ、同人業前筒そのほか御用立有無の義申し上ぐべき旨仰せ渡され左に申し上げ奉り候」に記された高島流採用の可否についての答書になると、かなり感情的な筆致が窺われるようになってくる。

(前略) 同人流儀を高島流と唱へ、蘭語を用い候事一通りならざる義と存じ奉り候間、堅く御差し留め仰せ渡され候方しかるべき哉と存じ奉り候。同人事、御当地え着く間もこれなく数十人門弟も出来候は、とかく新奇を好み候ように成り行き、そのうえ砲術家業の者共業前の儀かれこれと批判候を、俗に申す職敵にて悪しく申すように相聞け申すべき哉も計り難く存じ奉り候。前書の通り見分仰せ付けられ候は、素人の惑を解き、そのうえ御手厚き御武備の程も顯れ申すべく存じ奉り候。そのほか数玉焼玉馬上砲の業に至るまで猛烈にこれなく、御立用には相成り難く、御用立申せざる品に御座候。

前書のうち、モルチール筒並びにホイッスル筒この度上納等仰せ付けられ候は、先年蘭製の筒、田安より上納仕り候先例も御座候に付き、業前工夫仕り候へば、御用にも相立ち申すべく候、そのほかの筒並びに同人業前とも一切御用に立ち申すまじく存じ奉り候。

右の通り田付四郎兵衛へ相談の上、この段申し上げ候。以上

丑六月

井上左太夫

この答申を受けた結果が、白砲と忽砲の二門の買い上げとなったもので、既に前年から定まっていた方針通り

の決定であつた。井上左太夫による意見書の趣意が鳥居と同じになつたのは、大目付の見解に迎合したというより、和流砲術をもって時代遅れと手厳しく批判した秋帆に対する反感も原因のひとつであつたと考えられる。このとき幕府が買い上げた砲は井上左太夫に預けられ、のちに江川太郎左衛門と所属について紛争が起きている。

この秋帆に対する感情的な反発は、幕府の鉄砲方に限られたものでなく、他の和流砲術家たちの意見も同じようなものであつたと考えられる。その中でも最も激しく秋帆を批判したのは、父四郎兵衛の時代から門戸を張つてきた荻野流砲術家である。

これについて、たまたま荻野流砲術家篠山景德が、天保一二年（一八四一）五月末に著した『徳丸の記』を読む機会があつて、当時の砲術家たちの考え方が理解できた。篠山景德は、高島四郎兵衛と同じく坂本天山の子孫之進俊現に荻野流砲術を学んだ人物で、一時は荻野流砲術師範の門を張つたにもかかわらず、それを軽んじるようになった秋帆を一門の裏切り者と断じている。

この史料は希にしか見れないので、長文ではあるが全文を掲げるが、当て字が多いため読者の便を考えて現代仮名遣いに改めた箇所がある。

『徳丸の記』

長崎の高島四郎太夫が西洋各國に精撰せし火業を尊信し、伝受して、この度徳丸の原にて試打ちを命ぜられ、且つ、この業に長たる井上家をはじめ、諸組与力の伝流せしもの数人に見分をも命ぜられ、利不利の鑑定を尋ねさせらる。そもそも、この大砲火業は第一外寇の防禦武備の要技、ゆるがせにすべからざれば鑑定の数人各々偏頗の私念を捨て、銘々の見込み心底をも残さず奉るべきは勿論なれど、各々伝来の流法精粗まちまちにて、その粗なる所を逐年増益し、始めて全備せしもあり、或はその事は備わりて業向きの変えたるもあり、また一事は他に勝れ一事は劣りたるもあり、全く兼備大成したる流伝至つて稀なる事ゆえ、今度見込みを奉るにも必定その

流伝の精粗と、その修行の厚薄とにて論弁の巧拙過ぎたるは及ばざるべきながら、万一私意を加へ、強いて四郎太夫の業向きを嘲諷する念我にあらば、彼の多年の苦心積功を空しくするのみならず、自ら海岸御用の可否にも拘るべければ、この利不利の論、実に容易ならざるなり。厚く弁えて天理公正の論ありたし、只管懸念する事なり。おのれ景德、その発機形粧を徳丸の原に往きて見置きたれば、些か得失用捨の私議を竊かに左に挙げたり。勿論景德はこの鑑定的事に関わるにあらず、かつは、この道に発明なる英傑の高論と管見の私議とは大に齟齬すべけれど、些かも私念を交えず、全く目前に見聞したる所を以て論弁すれば、その意を得て明察すべし。

モルチール筒にてボンペン玉、そのほか打ちたる業は、八町にて玉着きは後切れは余程あり、されど発し方は相應にて、堅城堅陣をも打ち碎くべき随分相当の業向きなり。勿論この業は本朝諸流家にも素より伝来して最要に製用すれば、このボンペン玉を比類なしと言うべきにあざざれど、鉄壁も微塵に玉着きも細密にするの流法のみとも云がたし。中には張抜き玉に製し、道火も竹筒など用い、佃島にて昼夜の相図打ちを度とする心得などの伝にては所詮四郎太夫がボンペン玉にも及びがたし。

尤も井上家製造の玉ならびに我が荻野に伝わる秘事など、彼が業には遙かに立勝れることなり。彼が論に演技の場狭し、広場だにあらんには、いかほども強勢遠町の業をも打つべきにて、我が伝授の法こそ無類なりとて常人を誘引し惑乱すれど、彼がモルチール筒の製作分量を以て考えればさほどの意外の強発、かつ遠町へ飛行する業は所詮なしがたきことなり。いかにとなれば、彼が筒僅か長二尺の短筒にて巢口の径六寸七分ばかりの由なれば、およそ十貫目玉余の筒なるに、片類の厚さ一寸二分ばかりもありと聞く、さすれば我が荻野などに薄皮物砲烙筒など唱えて通例の木筒には勝るべきながら、玉目に持ち合いたる強葉は決して用いがたし。たとへ異邦の銅合せ格別の製造にもあれ、所詮玉目相應の業には打ち出しがたきは必然、推量にも察知せらるゝことなり。

まして車臺などえ裸筒にて仕掛け、味わいもなく不釣合の仕方なれば、逆も格別の強勢遠方などえ打出し、また小目当え錠かとの中する事などは思いもよからぬことなり。幸にして徳丸は十町以内に限るなれば、場所がら

相応の業向きとも言うべきなり。これらの近町を小目当もなく、おおよその目印え打ち出すには、軽便普通の木砲を打ち転ばし置きて業向き自在に用弁する事なり。大砲の上にては十五間にて八寸角を打ち、或は射芸の巻藁などに鈎しかるべし。また焼玉の製も諸流に品々あれど、彼が西洋流にては毒煙など用い、人をして即倒せしむるを第一とし、或は奇怪の燃方などを工夫し、人心を疑惑恐怖せしむる類い、皆夷人などが生来の得手にて、随分一理はある事なれば、これらは時の応変に取り用いるも可なり。然れども御國は神代の昔より当今に至って、万邦に勝れて義氣勇猛に逞しきは他の賞譽をまたず。かりそめにも卑怯未練なきを第一の弓取りと賞譽する國風にて、源平の戦いにも名を惜む武士は、互に名乗り会って一騎打ちの勝負を決し、敵も味方も皆戦いを止めて見物し、やがて打物捨て、いざや組んといふまゝに引組みなどするを勇者の面目とせしは、全く真武の和國魂の義氣凛々たるは外國の夷などの及ぶべからざるなり。

されば、彼國より古え渡来せし書籍にも、毒煙の類い品々著述せしも数多なれど、これを御國に用いて人を斃したる事はいまだ聞くも及ばず、当時大砲の火業を専務とするは海岸の防禦外寇を鑿殺しする為なれば、卑怯の法ながら毒煙などを加え用いるも亦可なるべし。尤も、この法は武備志の類い、かつは間近き四郎太夫が伝授の法など全く当時◎終あるべければ、御用いありて一事の用法に備え置きて然るべきなり。さて、ボンペン玉の土中え打ち込むこと、深く発出の強勢を殊の外に賞翫するも一通りは聞えたる事ながら、大方は不案内より出る事なり。おおよそ十町以内の町間にては、横打ちに目当の物え覗打つに打ち当て、さて、打ち抜き方の浅深強弱を試み論ずるを要とすべき筈なるを、今度四郎太夫が八町のボンペン玉など打たせんには、高矢倉に仕掛けて打ち出すゆえ、玉は斜め昇りして飛行し、その玉の勢い衰え斜め下がりして土中え打ち込む事なれば、打ち方の強勢ゆえに深く土中え打ち込むといふ理にてはなし。唯その玉量目の重み、かつは土砂の堅柔に随い打ち込みの浅深はあるものを、その打ち込みを目当に強勢の業なりと心得るは不案内の甚だしきなり。この段は常人はその筈の事にて、諸流の内にも心得違いを伝え来るも間々見えたり。然れども勾配高く打ち出せし玉の降下してさへ、これ

程に打ち込む事なれば、桁打ちにては如何ばかりの強勢ならんと推量する程の鑑定にはなるべきなり。

但し、業向き終えて玉先え行きて見しに、目印際に前日試打ちせしなりとて深さ四五尺ばかり、四方およそ一坪ばかり土を穿ちありしなり。こは殊に不審き限りなり。常人はかような事にて得心もすべきか、この道を心得し輩は合意せぬ事なり。既に当日打ちし玉は漸々一尺にも満たず、または玉の半身も打ち込みたるも見え侍り、また数玉とて打ちし業も小目当もなく四町場え打ち出せしまでにて、その玉至って間近にて散乱せしように見受けしが、これも玉先きにて心を付て見しに、彼が徒の内に二三百目ばかりの玉を六七ツ拾い取り持ち居りしが、かような玉を五六町の所にて拾い取るほどの弱き業にては決して実用には備え難く、ただ常人不案内を欺くまでの名目と見ゆ。荻野伝に数玉と唱う法は、かような物にはあらず。

元來彼が所持せし業向きの書面ありと聞きたり。その書は当日の業とは更に天地懸隔せし事なりと、ひそかに云し人あり、さもあるべし。

さて、このボンペン玉の道火廻りて発出するとき、その刃の土砂を発揚撒乱せしむるは固より、この砲録玉の当前の用なれば強いて感ずる程の事にあらず、たとえ一丈余り深く土中え打ち込みたりとも、万一道火打ち消え、世にいう盲玉をなせば勞して功なく、時に取つての謀慮謀約の図りごとを外すに至るべく、これ術士の深く恥じるべき所なれば、いかにも精密に製造すべきなり。四郎太夫が打ちたる玉五六發の内にも既に盲玉をも打ちたり。徳丸の原九町場の辺りに小川横たわり、この川え一発打ち込みたれば発せざる筈の様に彼の徒が言いしもあれど、砲録玉の製造は元より海水泥濁いかなる深淵え打ち込みたりとも打ち消さるゝにあらず、こは諸流普通の製作にて少しも意を用うれば、必ず打ち消えの過ちはなき事なり。まして西洋の法多く海上の争戦に用いるるべき事なれば、海水の為に消滅は決してあるべからず。ただ製造の精密ならざる不念なれば、この盲玉をば深く恥ずべき事なり。専務要前の場にては、たとえ一発にても是非と打ち込みたる玉のその俣打ち消しては、謀約応変大事の機会を失うなれば、最要に意を用うはこの盲玉を恐るゝ故なり。されどいかにも発機は利外の神速にて、毫髪の間

に打ち消えも間々ある事なれば、強いて誹謗するにはあらねど、おのずからこれらも巧拙精粗より生ずる所なり。モルチール筒はホイッスル筒並びに車臺などは、物の隙より窺い見しなれば委しき論に及びがたけれど、銅色など普通の鑄筒のように見ゆ、されど銅合せなどは鍛錬の邦なれば定めて精巧なるべし。尤も寸尺の長短、目方の軽重などは各々伝来に随ひ強弱利不利あれど、畢竟はその玉目の分量に應じおのずから寸尺を割出すべき法をだに弁えいるは、さまで格別の得失あるべからず。勿論すべてその筒の軽重長短強弱に應じ、發葉の強弱もおのずから生れ出るところなれば、この軽重長短の度量を分明にするは、即ちその技術の巧拙による事なり。さればこの道の大根元にて、假令その筒の過不足を明察にし、その分量相応の業向きを取り合せて可なりにも用弁するを上手巧者とも唱うべきなり。景德が鑑定には、彼が不用は不足の筒と見へたり。さて、また車臺の事は利害品々あり。異邦は勿論、御国にも稀に機巧を加え秘事秘具と唱えて伝るとも多けれど、皆一得一失にて、一貫して良法とも究めがたし、先ず車臺の利益を言わば、玉との大砲運転自在に僅かの工夫を以て押し行き、業前の旋転も自在に前後左右高下するに至っては、最上無双の要器ながらまた損害を言わば狭地嶮岨或は海濱の砂場溪澗の泥路などに至りては、通行にも演技にも車臺は甚だ不便なり。迅速応變の期に至り、進退途を失い皆無の失を生ずべきは、眼前にて化粧前にては心付けもありましかれど、肝要の事実には当らば車臺の損害、爰にて始めて発明すべし。されば我が荻野伝にてはこれらの得失を先師も深く勘案して車臺は用いず、別に要用の器械を工夫製造し、守城行軍平野は勿論、狭地嶮岨砂場泥路如何なる難所にも進退自在に用弁するを最第一に教え伝えたり。されば平野の常体にては却て車臺に劣りたる事もあるべけれど、事實の難所に臨みしは勝れて利益多し。彼是れを参考して車仕掛けは用いざる伝法さもあるべき事なれども、なお、また景德は夫をも偏固と見て、車臺も時に取つての要用何ほどもあるべければ、これも捨て置かず用いて大益の時ありと決定しぬ。されど四郎太夫がホイッスル筒の車臺などは殊に無益と思うなり。いかにとなれば、十貫目玉未滿の筒を廣大の車に仕掛け、その形粧、ただ常人の目を驚かすまでにて、莫大の費用推量するに余れり。彼の異邦の人かよ様の奇巧を製し、人心

を奪い驚惑せしむが事を思いはからず、近世浮薄の人情となり行き、徒に実事を失い耳目を貴ぶ世の風俗につれるにて、四郎太夫も卓見なければかく奇を好む弊に陥りたるなるべし。たとへ車臺を用うればとて、本朝の本願たる素朴の実用を失わず。製作方何ほどもあるべきなり。いかにもその形粧のみ厳しく無用の翫物にひとしき事慨嘆に堪えざるなり。

竊かに言う本朝の通称を以て呼ぶ時は、十貫目玉の鑄筒にて炮録玉を打つ事なるを、常人の耳目を驚かし悦ばしむる為に、モルチール筒にてボンペン玉を打つと蛮語に唱えたるまでの事を知るべし。その余種々の奇法奇器も蓄ゆる由聞き及べども採用すべき要器要法は覺束なし。席上にて手品の業するの類い多し。

馬上筒と呼びて短筒を打つ業殊におかしけるなり。勿論一事の用弁もあれば強て誘るべきにもあらず、井上家などにも腰指の短筒を片手に打ち出す業を伝えらるゝと聞たり。荻野にも騎馬の打ち方を伝うれど、侍鉄砲と唱え、やはり十匁玉以上を打つ業なれば、これは又別論なり。彼四郎太夫が打ちしは異邦の短筒にて、俗に火打ち仕掛けと呼ぶ筒を馬上に数挺携えて発出すれば、随分一理あるゆえ用いても然るべければ、その人の力量次第余計携うるも可なり。至極近の場合、拳と拳と組合うばかりの手詰めにて、筒先を彼の胸元に押し当て発出せば百発百中大に益もあるべき事ならんか。勿論かの火打ち仕掛け殊に短筒なれば、間数の十間も隔たらんには所詮相違なく打ち留るべき程の髓なる要用には備えがたし。常人は珍らしく奇ともすべけれど実用は薄き事どもなり。但し本朝の争戦往古は格別、元龜天正の頃など多くは歩戦にて騎戦は少く見えたり。まして当今差当たたる處は、海岸の要用外寇を鏖殺しにするを専務とせば、騎砲はさほどに用多からずと思えり。

備打ちと呼ぶ業は、僅かの時日に進退の足並みなど数十人の調練行届きし事感心せり。およそこの備打ちの調練を多人数にて数百発を放つ事なれば、先ずは怠り勝にて差当たたる化粧前の角前見分の礼式などにのみ偏りて、自ら争戦肝要の調練は練遠に成り行き、彼が業を見て初めて感心し、嚴重比類なきように心得たる輩も多けれど、これまた諸流ともに伝授するは勿論にて、その備の立て方名目など異同巧拙さまざまながら、その人数の組方は

漢土の古言より出て、多くは五伍の數に配當し、或は鉾矢・雁行・魚鱗又は從北後殿などと唱え、數隊組合する事、おおよそ和漢にも同じ法なるを、彼の西洋流にてはそれらの數にても構わず、人間の歩數にも拘わらず、只葭蘆の土に立ちし如く迫立し、麾の指揮に任せて只一齊に發機し、この玉繼ぎの間えは大筒を組合せ補助するも、時・所・位に隨て一種の良法にて、随分用いても然るべきなり。然れどもこれもまた、この法と限りては偏固管見なり。この備打ちの筒、玉目は七八匁ありと聞き及ぶ。三匁五分筒には勝る業もあるべけれど、火打ち仕掛けにて目当も慥ならぬは極て目当の中りは細密の業できがたし。玉繼ぎは口葉火繩などを用いざれば、少し手早くもあれど敵を覗打ち撰打ちするなどは極めて粗漏なり。かつ、筒先へ鋒を仕付けたるを働き前に抜き取り、また終わって始の如く仕付けたりするはいかなる訳にやあらん。何れにも彼國の風俗、かようなる巧をして人目を驚かすは彼が常の事なり。これ式の鋒を以て武用を弁ずる器物とするは、殊更におこがましと云えじ。本朝の武士魂を以て考うれば、彼が佩る處の劔たりしは日本の刺し身包丁にも劣れるものなるを、況んや人骨など割断つは思いも寄らぬ物なり。ましてこの鋒などは、忍び返しの釘も劣るべきを、いかに彼が法、彼か器械を信用すればとて、翫物とひとしき物を日本の地に入るさえ穢らはしきに、鉄砲は鉄砲の用を弁じ、劔は劔、鎗は鎗、各々その用異にして打ち任ずる所あればなり。鉄砲を携え出したらん人は、鎗の入るべき手詰めに至り、玉葉込替えの透間もなく發機なしがたければ、即ち携えし鉄砲を以て敵人を突き殺すべきはなし、殴き殺すべきは勿論の事にて、こは荻野流の伝にもたゞき殺すは嚴重に教示する処なり。彼これを以て考うれば、彼が法は只常人をたぶらかすのみの業多し。然れども至って手詰めの場合、稲麻竹葦の敵中え筒先を押当て、一齊に發出せば勝利必定と見究めたる時など、この法も亦大に便利勝れたる処もあるべければ、一得一失と見て然るべきにや、勿論和流にも狭地など唱え、至って嶮岨にては數人相互に一足抜きに入代り入代り打ち出す業はあれど、平場通例にては人間また人間と言って、人と人の間もまた一人だけ明けて立るを、おおよそ備立ての度にする所なり。これは働前相互に差し障りなき為にし、殊には彼の西洋流の如き一齊の發機に逢たる時、的になりて將某倒しを避けるべき

為に、透間を定めて組合せるなり。然れば彼が法、今打ち任せて採用かほどの益はなけれど、また用うべき場所もあるべくなれば、強て毀るべきにもあらず。

附言 小筒三匁五分玉を普通の持筒とし、諸組同心など全て渡させらるゝも皆同じ筒なり。至って軽便にて自在に取廻しもよけれど、堅実要用の業に至っては不足というべし。僅かの事にて六七匁玉以上十匁玉筒ならんには、いかなる堅物も打ち抜き強勢の業前なれば、願くば連々世上の小筒も十匁筒になし度ものと多年心底に思い続けたり。せめては諸組の与力ばかりも是非十匁玉を打つ事にさせまほしき事なり。京大坂の諸組与力は十匁玉を打つ事を先前より仕来たり。これは騎馬以上の侍は小筒は用いず、十匁已上を打つ事なりと心得おるなり。この訳は、小筒は足軽鉄砲と唱え、十匁目筒は侍鉄砲と唱え来ればなり。およそ十匁目玉筒を持合せ十分の強業にて発出せば三五目或は百目玉筒の抱打ちなど不釣合の弱業にて打出すより遙に業向き相倍して実用を弁ずる事なり。また時に取つての用法に小業なれど、火箭を製し打ち出すもまた一小利用にて可なりにも火攻の用をも兼用するなり。尤も堅物打ち抜き試しの論は、なお別に論弁せし書もあれば爰には漏らしつ。

野戦筒と呼びて備打ちの左右中央に車臺に仕掛け押し、小筒の玉継ぎを助ける打ち方を致せしは、勿論然るべき事なれど、これも珍らしとするに足らぬ事にて、諸流ともに彼が教を待ほどの事にはあらず。

但し、これ式の筒を車臺にせしは、いよいよ無益と思ふ事なり。

およそ大筒・小筒の業向き何れも堅城堅陣、或は来舶の漂うをも細やかに覗打ちし、或は十町二十町の遠方をも思いのまゝに打ち抜き破るを鉄砲の上の専要にて、この業向きを常に心に掛け、かつ、打ち試してだに十に二三も得る事至って難き大業なれば、只この玉業の強きと、中りの細密との二ツを切磋琢磨すべきは言うまでもなき事なるを、今度四郎太夫が徳丸の原にて見分をも受たる業前に、何らの目当堅物などえ打ち当て打ち抜きし業向きを一放にても見分に入ざるはいかなる事にや。モルチール筒その他にて八九時を打ちたるは高矢倉を用い、

およそ何町と積り目印を建て打つ業なれば、只前後左右高下の切れを試みる迄にて、たとへ細密に玉着きたりとも所詮覗打ちして打ち取る程の業の難儀はさもあるべし。然らば彼が手練相当に近町にて相当の標的を立て置き、これを細密に打ち抜く業を専一に見分に入ざれば、差し当たる御備えの要用異船え向い数百発打ち出せしとも敵船え中らずば、いかに手強き大業にもあれ、また火攻の妙術にもあれ、皆無の失は眼前なるべきぞや、然るを何らの目当てありて御國の武備を増補せばやと勉勵修練し、人を教導せしはいかなる管見にてやある。かつ、また備え打ちも同様にて、野戦筒も備筒も皆殻玉にて雛形ばかりを見分に入れたるは、これまた、いかなる事ぞや。玉なし鉄砲を以て仕組む者の備打ちの真似するは、平常稽古修行の席にはさもあるべきにや。かりそめならぬ見分の数人え対し、軽蔑この上もなき所行にて、第一に業向きの巧拙も実用の可否も更に見分けるべき手掛りだになきなりと、ひそかに苦々しく思い続ける事なり。見分せし人はいかに心得るゝにや。

附云 軍学者流に弓鉄を組合せ備立てするが定法のようになりきたりしは、前にもいう如く、往古弓を以て第一の長器とし、武士を弓取と唱うるが程の事なりしに、天文の頃にや始て鉄砲渡来し、以来抜群の長器たれば諸國諸家に珍重し、争戦にも用いきたりしなれど、僅かの年月にてや元和の御代となり、その後諸軍学者流にて伝来の備立ての中え、この鉄砲の業も弓の利方程の心得を以て弓え組合せたるように察せらるなり。然るに近来は年増にこの道開け、大砲の業取分けて増益全備し、当時の上にてひそかに言わば、いかなる和漢往昔の名將勇士再来すとも、大筒・小筒全備せし打ち方なれば魚鱗・鶴翼すべて弓矢を始め槍刀短兵の殻の妙法は、即ち大砲演技の上にては只一瞬の目睫にて、およそ敵間四五十町以内え来る程は、たとへ海川山を隔つとも地曳網にて小雑喉を漁獵するに均しく、鑿殺すべき大業なるものをいかなれば未だ左程の長器たるを弁えずして、鉄砲はいやしき足輕の業とのみ思い侮り、最愛の子孫など手をも付けざるように差し留める親もあるは何とせし不穿鑿にてやある。これらの心得よりまた一転して、彼の西洋法などを奇なるようにも思い迷う輩も出来しなりと、深く嘆息する事どもなり。

四郎太夫が見込む西洋の砲技は、本朝に勝れたりと信仰し、多年苦辛せしは実に報國の忠心その功勞比類なしと幾度も感心する事ながら、彼が管見と思ふ事は、文化の頃我師坂本孫之進に長崎御備の事を命ぜられ、曲淵甲斐守・土屋紀伊守が手に付き三ケ年も在留し、御備の業向きなど急仕込に教導せし頃、彼の父高嶋四郎兵衛は重く思いてこれを学び得たれば、取集めて急速の要用は伝与せしなり。然るを夫々の書物または同所の高木家の業向きなどを見聞して、最早本朝の砲技は、これらを以て盡せりと見究めたるは大なる管見姑息ならずや。第一井上田付の両家御秘事の御法は勿論、枚挙するも憚るべき事にて、その余御当地は勿論、諸國諸藩に近年増益成就して実用を専ら取用い來れるも數百家あるべけれども、当時昇平の尊き弓を袋にせし御代なれば、いかなる秘事秘術も世に顯れず、殊にこの業向きはすべて失費広大にして容易の微力に及びがたければ、まず差当たたる風俗に押し移り、世人の耳目に触れざるを以て本朝にはこの業不備と思ひたるにかあらん。勿論西洋は当今も争戦の中なれば、生死の關係する土地にて精選補益せし業なれば採用すべき廉々多かるべきはその筈なれど、まず第一に不審なるは備打ち指揮すべて蠻語を用い、かつ衣服冠など、殊には佩刀をも背に負うなどし、夷狄その俣の形装せしはそもいかなる所存にや、癡狂したりとも言うべし。彼の四郎太夫は一途に夷人の業を尊信する心より生ぜし過とも言うべけれど、その門下の一統もその体にて見分を受けるも不敬なりと諫めるものだになきはいかなる事ぞや。その業を試しむるは要事なれど、その形装を差し止めるは何の障りかあらん。近き頃は物事華美に流れ奇巧の翫物を好む人の多くなりて、いつとなく異國の製産を賞翫する事となりぬ。渡來の菓品のみは用をなすも多けれど、その余の奇巧の翫物は和製に勝れて目を驚かす事なれば、世の風俗にも拘りて益少なく害多き事なり。そもそも神代の昔より今に至りて王統連続せさせ給い、代々武將英傑出して國家を鎮護し、既に元和に至り神祖の御武徳四海に溢れ、昇平今二百年に余り義氣勇猛外國の夷らが比類すべきにあらざる御國なるものを、良もすれば彼の異國の翫物にて人心を誘引惑乱せしむる多罪なる事、年來心よからず思い続けるものを、まして況や武備技芸など彼か獸心もて造作せるものを、その俣本朝にて用い伝えん事汚穢の甚だしき、和國魂の忌すべき最第

一にて神の御罰も恐怖すべき事にあらずや、勿論砲銃の業は元來異邦より伝えしなれば良法だにあらんには何程も採用すべきは言うまでもなけれど、彼の夷らの形粧言語までをその倭生写すは、そもそもいかなる不所存にや。内を外にし外を内にせり、犯罪少なからずと思えり。彼の四郎太夫が御國益と思ひ込みたる心底解しがたく何とあるべき、只管不審なる事どもなり。

竊に云、彼が父四郎兵衛は坂本孫之進の教導を得て、鉄砲の一発も打ち覚えし厚恩もて永く師弟の道違約せじと誓いし事は、景德も兼て聞き知りたり。然れば当四郎太夫も父の業を伝なせしは固よりこの事にて、鉄砲は玉と薬とを込め、火繩もて打出すものと乳臭き頃より心得たるは、即ち師家の賜わるれば、その後進学発し、殊に和流を見破り夷術を珍重する程の見識にも至らば、第一師家の宗匠えも難問し、その上にて吾流儀をも立て世にも弘め、御國益にも備えんと思はゞ、実に彼が忠心功勞の程も的然と明白なるべきを、荻野の一流だに十か二三を学び得たるまでにて、その他數十流の名家数多あるを問ひ明らかめせで高島流など、自立せしは、本末を失いし所行片腹痛く嘲諷に堪えず、彼が心底甚だ卑しむべし。夷流を学びたればこそ、かゝる道ならぬ事にも至りしならんにや。神國の武士には似合しからず思えり、されど無面目に彼の夷流を信じ、終には数百里の爰に來り徳丸の原にて試打ちにも及びしは、彼が生前の面目大なる冥加手柄なる事は賞譽するに堪えたり。

この卷、始めに砲技の可否は聊も私意を加えず、御國用を専務と心得て筆を起したりしが、言葉の続き四郎太夫が管見非義までに及びぬ、よしなき事と思ひなせども備さに彼が心底を考うるに、本朝の大砲家を差別もなく輕蔑し、殊に師家の荻野傳を不覺悟の俛に打ち破り、内を捨て外に走り、本を忘れ末を追うその罪少からざれど、彼が所行をもて、その業を是非するは袈裟を悪むと言ひ、狂人ならずも走るなどいえる諺に類し、君子の道ならざれば、せめてはその夷流の業向き世にも立勝れ、御國用をも弁ずるならば、その罪を赦すべしと思ひしが、案の如く普通にも劣り、かつは害のみ多く、彼れ一人の無分別より世の人心を惑乱にも及ぶべくやとその段を深

く慨嘆し、かつはまた、彼の師家は我が師家にして物故の上なれば、師に代りて彼れが不法未熟を呵責するは亡師の意にして、此の道の此の道たる為なりと、再思決定して思う俟を書き記しぬ。他伝の名家は先ず差置き荻野伝を伝う諸英士これを明察し、景德が管見と彼が管見とを綿密に参考し、なお教諭の高評あらん事を希うのみ。

天保辛丑夏五月下旬

篠山伴景德誌

筆者の篠山景德は、幕府の御先手組に属す荻野流師範で通称を十兵衛といった。彼が秋帆の演習を参観したことは、榊原主計頭の書面に「去丑年中長崎会所調役頭取高島四郎太夫義ボンベン筒打ちためし仰せ付けられ候間、万石以上その他布衣以上の面々伺いの上見物のため罷越し候儀もこれ有り候間、十兵衛義武事稽古の事に御座候間、願の通り仰せ付けられしかるべき哉に存じ奉り候」とあるので、正式の見分役ではないものの陪臣や浪人と違つて便宜を受けられる立場にあつたものと考えられる。

しかし、景德が冷静かつ客観的に著述したと随所に記しながら、感情的な敵愾心を押さえ切れないのは、秋帆の性格から荻野流坂本派の先輩に対して、恐らく参府の挨拶をしなかつたのではないか。これに比べると井上左太夫の批判は、かなり押さえたものに映る。なお、左太夫の答申を批判した反駁文が金令山人の名を仮て発表されてきているように、この『徳丸の記』についても匿名の『駁徳丸之記』が著されるなど、西洋式火術の導入について可否の議論が戦われている。しかし、批判派が実名を掲げて批評しているのに対し、擁護派は仮名や匿名でしか反駁していないところをみると、幕府が秋帆の西洋流砲術を評価しなかつた理由が、鳥井耀蔵一個人の蘭学嫌いによるというより、専門家である和流砲術家の大方の意見も大きく影響したはずである。

これも『海防彙議』の編者塩田順菴が注解を加える頃になると、ペリーの来航などがあつて情勢も大きく変わった事もあつてか、冷静に評価されるようになった。

按スルニ是秋帆カ崎鎮田口氏ニ由テ上レル所ナリ乙丑ノ夏之ヲ東都ニ召テ其技ヲ徳丸原ニ試ラル当時衆議紛

拏シテ用ラレスト雖人皆西洋火術ノ精妙ナルヲ知テ從學スル者亦多シ今謨尔底兒忽徹斯兒天雷石榴彈等打放製造ノ法ノ我ニ關ケタルハ実ニ秋帆カ力ナリ

(塩田順菴編『海防彙議補』卷十三)

勝海舟が『陸軍歴史』において、「高島氏の洋式銃法を上言せしも、当時監察の評議は迂拘の腐論を主張して擯斥せり、況や従前の砲家者流なる者は其己れに異なるを嫉み、百方妨礙して排除せんとするは恠むに足るなきなり。然りと雖も開進自然の氣運は到底止む可らず、癸丑の後上下始て大に悟る所ありて大船製造の禁を解き、又西洋の銃法をも盛に採用するに及び、愈彼を知り己れを知るの急務なるを了会し、漸々海陸文明の利器を購入し、以て我が彊禦を固くするの端緒を開きたり。是れ高島氏先鞭の功と謂て可なり。」と述べたているのが、正鵠を得た評といふべきであろう。

幕末留學生 澤 太郎左衛門の軌跡（一一）

霜礼次郎

三幕末の武士の教育と生活 ——特に学校教育と砲術について——

(三) 江戸における学校教育と西洋科学技術導入

嘉永六年（一八五三）六月三日、ペリーが浦賀に来航した日は、澤太郎左衛門（天保六年（一八三四）六月四日生まれ）が満一九才の誕生日を迎える前日であった。

このペリー来航は、わが国最初の西洋技術導入である鉄砲の伝来以来、長い鎖国を打ち破った幕府や諸藩が、西洋科学技術導入を真剣に検討し始める重要な意義をもつことになる。

この頃、一九才の太郎左衛門は幕臣の子弟としてどのような生活をしていたか定かではないが、前述した様に、恐らく昌平坂学問所（図一、二）に於いて文義を究め、試験に合格して、安政三年九月一〇日に箱館奉行所江戸御役所書物御用出役を仰せ付けられ、そして翌同四年五月には長崎に於いて、オランダ人に海軍伝習を仰せ付けられていたのである。

この長崎海軍伝習所に派遣される前後の経過については、『赤松則良半生談』の長崎「海軍伝習」御用の項に述べられているので、引用し要約してみる。

此第一回の伝習生は、幕臣三十七名、外に大工職二名、諸藩の有志者二十九名（鹿児島藩十六名、熊本藩五名、福岡藩二十八名、佐賀藩四十八名、萩藩一十五名、津藩十二名、掛川藩一名）であった。また、下士以下は永井玄蕃頭の建議で、豊太閤朝鮮征伐以来の由緒ある、讃岐国塩飽島の壮年者から之を選抜した。

伝習生の幕臣三七名中、矢田堀景蔵（小十人賛善衛門組）・勝麟太郎（小普請組奥田主馬支配、後伯爵勝安房）・永持享次郎（御徒目付）の三名は「一船総督の心得を以て船の製作運転並大砲打方其他研究可致

候。諸事永井玄蕃頭之指図を受、御取締別て厚心掛」云々といふ辞令を受け、其他望月大象・中島三郎助（浦賀与力、函館の役千代ヶ岡砲台にて二子とともに壮烈なる戦死を遂ぐ）・佐々倉桐太郎（浦賀与力）・春山弁蔵・岩田平作・小野友五郎・鈴藤勇次郎等、他日幕府海軍の柱石たるべき人々があつた。

勝・矢田堀兩人の伝習生に選抜されたのは、江川太郎左衛門あたりの推薦であつたらうと思ふ。当時榎本釜次郎（後子爵榎本武揚）は矢田堀と親友で、学問所（昌平黌、御茶の水外）に在つて起居をおなじくしてゐたが、矢田堀が命を受けて長崎伝習に赴くといふので、之に頼んで其従者となつて長崎に下り、同地では矢田堀の玄関に居つて、員外の者として共に海軍伝習を受けてゐた。

この文は第一回伝習生とその選抜の経緯について述べ、勝麟太郎と矢田堀景蔵が江川太郎左衛門の推薦によるものとしている。この事は前述した様に、昌平坂学問所——蘭学または英語塾——江川塾の関係が想像される。また、矢田堀の親友榎本釜次郎が矢田堀の従者となつて海軍伝習を受けていたということは、榎本の熱意がうかがわれる。榎本は安政三年に第二回の伝習生として、幕臣の子弟のみ一二人の一人となるのである。

安政四年（一八五七）三月に第一回伝習生は学術も大いに進歩し、永井玄蕃頭は矢田堀以下一六名を率いて、オランダ外輪汽船で伝習用として用いられていた観光丸に搭乗して江戸に入り、四月になり、築地の講武所内に御軍艦教授所を設けた。

同年八月五日に、オランダからヤッパン号（後の咸臨丸）が新任の教師を乗せて長崎へ到着した。一〇月には太郎左衛門を含めた第三回の伝習生が長崎に到着した。この間の経過が、半生談に記述してある。

私は、即此第三回の伝習生の選に入つて長崎に下つたもの、一人で、当時の人選其他の事情をいえば、此度の伝習生は皆直参である旗本・御家人の倅、二・三男、厄介から選抜するといふ事で、万事は御目付永井玄蕃頭が掌り諸向に相談がある。蕃書調所からは頭取古賀謹一郎の鑑識で、第一に荒井光太郎・設楽莞爾と私の三人が其選に入つた。荒井光太郎はさらに既に三十歳に達し子供もあつたが、極めて真面目は男であつ

た。私は長崎伝習の事あるのを耳にして行つてみたいと思はないでもなかつたが、別段運動らしいことも爲なかつたのに此選に入つたから非常に嬉しかった。

この文から第三回の伝習生の選抜は直参旗本、御家人の子弟から行われ、職場の上司の推薦により、赤松はその選に入り、非常に喜んだ様子がわかる。

尚^{なま}蕃書調所に居つた者では、荒井・設楽・赤松三人の外に、畠山邦之助・中山一助・川上万之丞も亦伝習生となつて、後から来たので長崎で出会つた。此三人は御小姓組で御目見以上の身分だから、私達とは其格が大分に違つてゐるので、和蘭語は碌^{ろく}に出来なかつたが、其態度は驕慢なので、私達は敬遠して余り近寄りもしなかつたが、彼等は御小姓組から伝習生として派遣されたのであらう。内田恒次郎は小普請万年千秋

(明治に入つて陸軍中佐に進み、軍伍を退いて沼津に退隠した)の弟で、此時は未だ万年姓であつたが、二一、二歳でもあつたらうか、曩^{なま}に述べた通り一八、九歳で学問所の諮問に甲科及第をして俊才の間こえがあり、それに蘭学にも涉^わつて居るといふので、第一に選ばれて此時の伝習生となつた。沢太郎左衛門も同期の伝習生であつたが、其他河野栄次郎・田辺太一・根津欽次郎・田島順輔・兼松亀次郎・松本良順(後男爵順)・高松力蔵・海老原伝四郎・久保紀之助・白井勇次郎・斎藤源蔵・岸本惣蔵等も其仲間であつた。

この文から伝習生の中には、オランダ語が出来ない者もいた事が判る。また、昌平坂学問所と蘭学塾の接点で、太郎左衛門とほぼ同年配の内田恒次郎の事が出てくる。このことから澤太郎左衛門がペリー来航の年、すなわち一九才の時には、内田と同様に昌平坂学問所の試験に合格したことが想像される。だが、蘭学塾での接点不明である。しかし、第三回選抜基準は、蘭学塾での接点、更には江川塾での接点が考えられる。

前述の赤松大三郎の記述に、第一回伝習生に選抜された勝、矢田堀は江川太郎左衛門あたりの推薦であろうとある。この勝麟太郎が西洋科学技術の導入を念頭に入れて、海軍伝習所新設にどの様にかかわつたかを調べてみ

たい。

『大久保利謙歴史著作集⑤』「幕末維新の洋学」の「海舟勝麟太郎と蘭学」——勝と蕃書調所——に蕃書調所と長崎海軍伝習所の創設に勝麟太郎がいかにかわったか、新史料をあげて詳しく述べられているので引用してみることとする。

そういかかわりあいの原動力になったのは、青年期にまず蘭学、すなわち西洋知識解明の学と取りくんだことである。蘭学は、最初は医学とか天文学とかの部門からはじまり、もっぱら利用厚生、編歴などの技術の学であったが幕末となると、経世の学、国防の学へと変わって、志士必学となっていた。勝を捉えたのはそういう経世、国防の学としての幕末蘭学であった。勝のみでなく、たとえば、私が最近活字化をはかった勝の後輩の幕臣赤松代三郎（のち則良）の『半生談』をみると、赤松も勝と同じように、はじめ蕃書調所で蘭学を学び、それから一転して洋式海軍にすすんでいる。

勝は蘭学書生としてスタートした。そのきっかけについては、吉本襄編の『校訂水川清話』に勝の話が載っている。少年時に、江戸城中で和蘭献上の大砲をみて、「これでなければ、これからは国防の役に立たない」と感じ、それから蘭学の大家箕作阮甫を訪い、阮甫から世界地図を見せられ、決然として蘭学を学ぼうと決心した、という。それから箕作阮甫に入門しようとしたが体よく断られ、やむなく福岡藩の蘭学者永井青崖に入門した。

勝の蘭学学習のことは、前掲の『校訂水川清話』に、蘭学書生には是非なくてはならない日蘭辞書の『ゾーフハルマ』の大冊五六巻を二部手写したという苦勞のエピソードなどが書いてある。その写本には勝の跋文があって、弘化四年（一八四七）、五年、二五、六歳のことということがわかる。それから嘉永四年（一八五二）、二八歳で、ささやかな蘭学塾を開いた。蘭書と西洋兵学を講じ、その塾からわが国に西洋統計学を導入した杉亨二というようになすくれた洋学者を輩出している。つまり嘉永の初年には一応蘭学、それに西

洋兵学という幕末の新蘭学を以て門戸を張ったのである。この嘉永の末にアメリカの特使ペリーが日本に開国を求めて来航した。それへの対応が勝にとっては出世の糸口となったのである。

三〇代に入った非職の旗本である勝は、積極的に幕府当局に働きかけ、懸命の努力をした。主席老中の阿部正弘はアメリカ大統領の国書の訳文を、諸大名以下幕臣の旗本まで公示して意見を徴した。これに対して勝の上申は、アメリカ黒船の侵入に対する軍事（海軍）適応策として、江戸湾に台場の建設その他洋式軍艦の建造等の必要を強調している。さらに、軍事学校の教練学校設立を建言したのであった。これは洋式兵学の立場をとる勝蘭学の新式海軍建設論といえる。

この洋式海軍創設と平行して、幕府は外交開始に備えるために、洋学所の設置をはかっている。これは幕臣の外国語教育が必要となって画策したもので、従来西洋事情の調査を行っていた天文方の拡張の形で行った。

安政二年正月一八日、勝は小普請小田又蔵と共に「蕃書翻訳御用手付」を命ぜられた。

安政二年七月には、海防掛（弘化二年設置）筒井政憲、川路聖謨、岩瀬忠震、大久保忠寛、水野忠徳などのエリート幕吏の中から、筒井、川路、水野、岩瀬の四名が蘭学（洋学所）設立委員となり、勝と小田は補助員ということになる。勝は大久保忠寛の推挙により、岩瀬忠震の配下になったという。ここで勝は無役から現役になった。

勝、小田の二人は蕃書翻訳御用手付となると、正月、二月にかけて「蕃書翻訳御用取計方見込下案」を提出した。勝案は、前述の嘉永六年七月の上申と共通で蕃書翻訳御用の目的が軍事的な国防学で、特に海防関係の蘭学をまず翻訳すべしとしている。これに対して小田案は世上一般に蘭学排斥とは言わないまでも西洋に対して、対外非友好的警戒論を唱えている。小田は蘭学を修めた俊英で川路聖謨と意気投合し、この小田の意見は当時の幕吏一般の対外感を代表するものであった。即ち、軍事型と非軍事型の対角的な意見が出されたのである。かくして、小田の非軍事型が蕃書調所となり、勝の軍事的（国防科学）が分立して長崎の海軍伝習所となったというこ

とができよう。

勝の「見込案」について問題となったのは、安政元年、勝が友人竹川竹斎に宛てた書翰中に左のような興味ある貴重なニュースを伝えていることである。

長崎之英船、永滞留、浦江廻り候との風説に御座候、右之趣意は小子建白別紙に粗相見江候如き振合に御座候、来春は蘭人より蒸気船并右之學術教受之大先生参り候、船は年々二艘宛と申事に御座候、教受の學術は砲術、究理、天文、地理、航海、器械、兵学と申事にて候、此方よりも幕府之士より人物御選にて修行被仰付候由、誰人が右之撰も当候哉、これ而已は中興之勝事と奉存候

補説……この書翰は改造社版全集第一〇卷「海舟書簡」と講談社版全集2「書簡と建言」に収録されているが、前者は安政元年八月晦日付とし、後者は同年一二月二六日付とする。この日付の違いについて、後者の編者の解説には何ら触れられていないが、「英船云々」の記事（スタリング渡来）から一二月とする方が無理がない。

これによって勝は安政元年に来春、すなわち安政二年の春にオランダから蒸気船と海軍教授が来て海軍関係諸専門科目の教育をするという噂を聞いたこと、そして、その受講生に選ばれることに意欲を燃やしていたことがわかる。勝はそこで急遽目付大久保忠寛に接近して自薦運動を行い、それが功を奏して前記の任命となったのではなからうか。まずそれにまちがいはなからう。いずれにしても、この勝書翰によって当時幕府内に来春オランダから蒸気船と海軍軍事教育の教官が来るといふ風評が流れていたことが分かるが、これはおそらく、アメリカその他の諸外国の来航に備えるため幕府が洋式海軍の創設を内決して、前年（嘉永六）九月、長崎駐在のオランダ商館長ドンケル・クルチュウス（Donkel Curtius）を介してオランダに軍艦その他数艘を発注した。それに対してクルチュウスは対日関係の好転のためにこの幕府の要請を有効に受け止めようとして長崎奉行に対し、さらにすすんで幕府の海軍建設にはその前提として日本

(幕府)側の海軍関係の諸技術教育が必要であると説き、それにはオランダが援助、協力することを極力示唆した。このクルチュウス対日外交は出先機関の外交であったが、幕府首脳もいたく教えられ動かされた。しかし、幕府は何よりはやく洋式軍艦がほしかったのでその注文を急いだが、あいにく折からヨーロッパではクリミヤ戦争が勃発したので、オランダもはるばる軍艦を日本に売り渡すことが困難となった。そこで幕府の強いての要望に応ずるため、翌安政元年七月、パタビアにあったスンピン号 (Soembing) を日本に回航せしめて、アジア情勢の探索とともにそれにはファビウス海軍中佐が搭乗して、幕府の海軍創建に関する貴重な種々の勧告を行い、これが幕府当局を動かした。また小規模の海軍伝習を行った。こういう事実が転々として右の勝書翰にあるような風評となったのではあるまいか。

右の勝書翰は安政元年十二月のものであるから、まだこのオランダとの交渉の途中で、しかも、この接衝も当時の厳秘のうちに長崎奉行が行っているので幕府内でも当局関係者以外は誰も知らない、それを勝が早耳でキャッチして、これを友人竹川竹斎に内報したものと察せられる。それが勝の幕府海軍への進出を予約したのである。そういう意味において、この早耳と、それを伝えた竹川竹斎宛勝書翰は、幕末幕府の海軍史にとっても面白い史料である。

幕府は長崎に伝習所設置の議となつて、安政二年七月二十九日正式に決定した。矢田堀、勝以下一八名が選ばれた。勝は伝習生に選ばれたのは予期した事であり、同時に蘭学者(洋学者)とも別れている。しかし、蘭学とまったく縁を切ったのではなく、蘭学の軍事化であつて、これからいよいよ勝蘭学はその本領発揮となるのである。

一方、「蛮書翻訳御用」は安政二年八月に西丸留守居古賀謹一郎を洋学所頭取に任命した。古賀は洋学の大家箕作阮甫に協力を頼んだ。翌三年二月洋学所は「蕃書調所」となつた。この江戸の調所は、非軍事派の著名蘭学者が教官に任命された。人選は前記の小田、勝の蘭学者名簿が原簿になつたのであろう。筆頭には箕作のほか杉田成郷を任命し、以下川本幸民、手塚律蔵、松本弘安(寺島宗則)、村田蔵六(大村益次郎)、西周、津田真

道、加藤裕之、神田孝平等が次々と登用された。かくして、長崎の海軍伝習所が勝らの幕府内の軍事関係の人材を集めたのに対し、江戸の調所は非軍事派の著名蘭学者を結集したのである。

調所は安政四年正月に開所、幕臣子弟を募集して最初は一九一名であった。蘭書の会読、輪書、素読稽古とあり、漢学塾にならったカリキュラムである。これに加えて外交文書の翻訳を命ぜられ、学校というより訳局の性格が強くなって、幕府外交の下部組織化した。この調所は後に明治政府になって、文教部門に接収されて洋学校・研究所となり、明治一〇年には官立の東京大学となって、西洋諸学術導入の中心機関へと発展したのである。

以上、大久保利謙氏の勝についての記述を引用し要約した。勝の蘭学を学ぶことになったきっかけや、蘭学塾を開き、いかにして幕府に近づき、彼の軍事的蘭学論を幕府に提出して、西洋技術の導入を目的とした長崎海軍伝習所の創設と第一回の伝習生となった経緯が述べられている。そして重要なことは、当時蘭学界は、軍事的と非軍事的な両派が存在しており、前者は長崎へ、後者は江戸でそれぞれの役割を果たしていることである。

大久保利謙氏の云う軍事派の系統は、高島秋帆を筆頭に江川担庵、佐久間象山そして勝麟太郎へと続き、幕末の江戸においてそれぞれ私塾を開き、砲術指南の塾として、全国から多くの青年達が集まった。澤太郎左衛門はこの系統からいえば、息子鑑之丞の記述にある様に江川塾に学び、いずれかの蘭学塾に学んだと思われる。

当時江戸には多くの蘭学者が名を連ねていた。佐野正巳著『国学と蘭学』に安政二年の勝海舟の手記の中に「江戸在住蘭学者」としてその名を紹介している。

(勝海舟手記)

杉田成郷 酒井修理太夫家来 下谷御徒町

川本幸民 九鬼長門守家来

杉田玄端 山伏井戸

宇田川興斎 当時天文方出役御庸

木村軍太郎	堀田備中守家来	当時天文方御庸
松木弘安	松平薩摩守家来	玄朴塾 後寺島宗則
池田洞雲	松平肥前守家来	
坪井信友	信良義弟	後豊父名信道
大鳥圭甫	大木忠益塾頭	後大鳥圭介
本間軍兵衛	酒井左衛門尉家来	玄瑞塾
間宮繁之進	浪人	律蔵塾
中山洞春	堀田備中守家来	律蔵塾
金森賢作	松平出羽守家来	上屋敷
平紀一	下曾根金三郎方	
手塚律蔵	佐倉出の人	本郷御弓町
坪井信良	松平大膳太夫家来	深川冬木町
高島五郎	松平阿波守家来	牛込御徒町 後眉山
高須松亨	当時天文方出役御庸	
武田斐三郎	加藤於菟三郎家来	当時函館 後成章
杉純道	勝麟太郎塾	後享二
八木元逸	松平薩摩守家来	坪井信良塾
林洞海	両国葉研堀	後梅仙
箕作阮甫	松平三河守家来	湯嶋
石川平太郎	藤堂和泉守家来	下谷

大木中益	芝浜松町	後坪井芳洲又為春
市川齋宮	松平越前守家来	當時天文方出役御庸
柴田収蔵	當時天文方出役御庸	
石川宗見	芝口三丁目	
西川洋作	松平肥前守家来	
矢田部慶雲	江川太郎左衛門方	
鈴木玄昌	玄朴塾	
佐波銀次郎	堀田備中守家来	律蔵塾
神田孝平	竹中図書助家来	玄朴塾
曾田勇次	浪人	
片田哲造	松平仲家来	
下間竜助	水戸御出入	
高松讓庵	岡部内膳正家来	天文方出役御庸
大島惣左衛門	當時水戸	
小山杉溪	榊原式部大輔家来	上屋敷
藤田圭甫	大村丹後守家来	信良塾
芦田米太郎	松平伊賀守家来	律蔵塾
大槻俊斎	仙台	下谷
島玄甫	竹内図書助	家来弁慶塾
安田雷洲	御家人銅版々工	四谷新宿

伊藤貫齋 玄朴養子

下谷和泉橋通

石井密太郎 藤堂和泉守家来

当時薩州行不在

牧 穆中 浪人

青山宮様御門前組屋敷

箕作秋坪 松平越前守家来

阮甫養子 当時天文方出役御庸

東条英庵 松平大膳太夫家来

当時浦賀御庸

小関高彦 酒井左衛門尉家来

下谷三味線堀

原田敬作 池田内匠守家来

玄朴塾

布野雲平 浪人

牛込御徒町

津田真一郎 松平三河守家来

当時在所 後真道

川島元成 松平近江守家来

大槻俊齋塾

田辺順甫 浪人

一色邦之輔方

竹内玄同 有馬日向守家来

麴町三軒屋

田口俊平 久世大和守家来

都甲斧太郎 御馬方隠居

計五十八人諸侯臣籍三分の二にて、特に浪人と記せし者五人

幕末になると、むろん蘭学といっても兵学が中心であり、多く蘭学者は医家にして兵学者であった。澤は、この中のいずれかの蘭学塾で学んだのであろう。ちなみに前述の澤と伝習所同期の赤松大三部が学んだ坪井塾の坪井信良についての記述が、宮地正人著『幕末維新期の文化と情報』にある。

坪井信良については、『赤松良則半生談』の中にも述べられているが、彼の書簡から幕末の蘭学者、蘭学塾の様子がうかがえる。

ところで蘭学は嘉永期頃から上昇期に入る。「近来異国船諸国へ渡来に付、諸国一同海防大嚴重のよしに付、西洋流の学、別て砲術大流行。諸侯にも蘭書を御習の人往々出来候。当時都下は兵学者の世と相成申候。依て少々兵書を読書申候者は忽ち彼此の諸侯より引張合にて、意外に立身致し申し候者もあり、又小子抔存知の者多く、医業を止め専ら兵書翻訳を以て渡世する者多く、亡父門人にも段々兵書読出来、又兵書読と申迄に至らずして禄を得候者もこれ有り、誠以大盛事に御坐候・・。蘭医中に一種兵書家なる者出来、皆々揚名貪利、商人同様或は更に甚きの行いも出来、随て何の關係もなき医者迄も汚名を得るに至申候。扱々大歎すべき事なり。実に右の時勢にて医者よりは兵書家の権強く相成、必竟は勞すること少くして利を得る事多き故、半医半兵書家も往々これ有」と信良は報告している。

蘭学が全面的に陽をあびるのは嘉永六年からである。箕作阮甫の長崎行きについては彼は大きく喜びで「阮甫への台命は実には同社の大慶、北学の開闢の基と存じ奉り候」とのべ、万次郎の浦賀表出役についても、「実に有能の人の勇進の期に御坐候」と興奮している。

以上、澤太郎左衛門が幕末激動の青年期に江戸において成長し、七才の時、天保十二年、高島秋帆の徳丸原に於ける西洋新式の銃隊操練を父と一緒に見聞きした事が十分に想像され、昌平坂学問所に学び、試験に合格して幕府の役職に就いた。同時に私塾において蘭学と兵学を学んだと思われる。

勝の語録集とも云うべき『海舟先生水川清話』（吉本襄撰者）の中に澤太郎左衛門の事が、非常に興味深く書かれている。勝が蘭学塾を開いた嘉永四年、二八才の頃から勝が第一回海軍伝習生として長崎に行くまでに、澤が勝に歩兵の調練を受けていたことが記述されている。澤がいわゆる軍事派の蘭学の系統に身をおき、勝に続いて澤の勉強家としての才能が認められて第三回の伝習生となり、オランダ留学生として選抜されたと思われる。

澤太郎左衛門もおれの昔からの友達で、おれよりは未だ餘程若い筈であったが、到頭死んでしまった。あれは、昔しおれから歩兵の調練を受けたものだが、其後おれは長崎に行つて、いろいろ遣つて居る内に、あ

れも海軍の方へ廻はされて、同じく長崎へやつて来て、蘭學の稽古など始めたがなかなかの勉強家、書生の間でも指折りの才子だといつて、教師も常に賞めて居た。さうかうする内に、幕府は海軍の學術研究生を和蘭へ派遣することになったので、澤も榎本、林、赤松、眞木などいふ連中と共に歌洲へ留學を命ぜられた。全體、此頃長崎で海軍の修業をして居つた書生は、随分澤山あつて、中でわざわざ選拔せられて海外へ留學を命ぜられるのだからこの一組は兎に角優等生ばかりであつた。それで、これ等の連中は何れも四五年ぐらゐ和蘭で勉強して歸つたが、もう學門もほゞ成就して居たから、それぞれ一廉の役目を勤め得たので、例の咸臨丸の如きも、外國人の手を借らないで、無事に太平洋を乗りまはして歸つて來た。そこで、この頃は、築地に海軍の練習所が建て、あつたから、まづ差し當り、新歸朝者をこの方へまはして、兵學の教師をさせることになつた。併し兵學の教師などといった所が、今から考へて見れば、教へられる方もまるで夢中さ。

兎や角する内に、世の中は勤王論や佐幕論で、段々物騒になつて來たので、今の連中もそれぞれ見る所によつて、方向を定めなければならぬ、さゝ斯うなつて來るとこの連中との間で戦争すると云ふものと、せぬと云ふものと、即ち主戰論と、非主戰論との二派に分れた。それで澤は、榎本等と函箱の脱走組となつて、主戰論の原動力となつたが、函箱の戦に負けて、榎本大鳥等を始めとして、主立つた面々は、皆な捕縛せられて仕舞つた。それから姑くするうちに、天下は治まり、世は追々に歐羅巴の新文明を移植することとなつて來た。そこで、築地に文明流儀の海軍兵學校が出来たが、此の時の校長とも云ふべきのは、今の海軍中將中牟田倉之助で、其の時分には、之れを學校の頭取と云つて居た、澤も其の時は、最早赦されて居たから、人材登庸の仲間入りをして、兵學の教官となつて、姑く育英の事業に一身を投じて居た、おれは、この時分海軍卿としては居たけれども、おれの流儀として、大體の事ばかりに眼を着けて細かい事には、一向無頓着であつたから、當時の事情は、餘りよくはしらなかつたが併し此の學校からは、随分澤山の人物を出したかと思ふ。其の後ち澤も今がよい時機だと云つて、學校を辭職したが、元來あれは財産があつたから、その後

静かに晩年を楽しんで居た。見なさい澤等の手で仕立て上げられた海軍兵學校の卒業生で、今は海軍の樞機に與かつて居るものも澤山あるが、皆ないやに豪傑ぶつた顔をして居るから可愛しくなるよ。

最後に、江戸時代の蘭学者学統図（『国学と蘭学』より、図三）をかかげ、これら蘭医が時代の流れに応じて、多くの兵学書の訳者となり、日本の西洋近代技術の導入に多大の貢献をしたかをその実績の中でみることにする。安齋会長より提供いただいた文献、『幕末兵制改革史』（大絲年夫著）幕末軍事史年表が載っている。兵書並びに国防論著作が年代順に整理されている。澤はこれらの著書を、恐らく幕臣として、又、蘭学塾塾生として読んだり、聞いたりする機会が十分にあったと考える。

幕末軍事史年表

年号	(西 曆)	兵書並びに国防論著作
享保一二年	(一七二七)	○紅毛火術録 鮎川竹撰
享保一四年	(一七二九)	○和蘭馬術書四卷 ケイズル口述 今村市兵衛編
		○鈴録・鈴録外書 荻生徂徠著
		○鐵砲茶話 佐枝戸重著
安永八年	(一七七九)	○周發圖說 坂本天山著
天明三年	(一七八三)	○赤蝦夷風説考 工藤平助撰
天明五年	(一七八五)	○三國通覽圖説 仙臺藩士 林子平著
天明六年	(一七八六)	○海國兵談 林子平著
天明七年	(一七八七)	○火器發砲傳 志筑忠次郎譯
寛政二年	(一七九〇)	○和蘭築城書 前野良澤譯
寛政七年	(一七九五)	○魯西亞志附録 志筑忠雄譯

- 經世秘策 本田利明著
- 寬政九年 (二七九七) ○北地危言 大原左金吾著
- 寬政一一年 (二七九九) ○遠西軍器考 石井庄助松平定信の命にて記述
- 文化元年 (二八〇四) ○鐵砲問答 幕府鐵砲方 井上左太夫氏清著
- 文化四年 (二八〇七) ○三銃用法論 佐藤信淵著
- 文化五年 (二八〇八) ○海岸砲術備要 本木正榮譯
- 銃砲起源考 大槻玄澤撰
- 御家流火術大意詳説一卷 松平定信著
- 鐵砲窮理論 佐藤信淵著
- ボスシギーテレイ、コンスト國字解 石橋助左衛門譯
- 三銃用法論 佐藤信淵著
- 防海策 佐藤信淵著
- 野砲の圖 佐藤信淵著
- 自走火船圖説 佐藤信淵著
- 御家流火術大意 松平定信著
- 焰硝採作法合葉製法 山鹿素行遺著
- 大銃車戰法 佐藤信淵著
- 陸海戰圖解 辻章從譯
- 海防問答 平山行藏著
- 止戈樞要 大關業著
- 文化八年 (二八一二) ○大銃車戰法 佐藤信淵著
- 文化九年 (二八一三) ○陸海戰圖解 辻章從譯
- 文化一〇年 (二八一六) ○海防問答 平山行藏著
- 文化一三年 (二八一六) ○止戈樞要 大關業著
- 文化六年 (二八〇九) ○三銃用法論 佐藤信淵著

- 文政二年（一八一九） ○氣炮記 國友藤兵衛著
- 大小御鐵砲張立製作 國友藤兵衛著
- 火砲圖說 井上貫流著
- 文政九年（一八二六） ○火攻知要 高松藩士 寺井肇撰
- 砲術基礎 岡内章平譯
- 文政一二年（一八二九） ○製煉發蒙 坪井信道譯
- 那波列翁傳 小關三英譯
- 天保八年（一八三七） ○駛舌小紀 渡邊華山撰
- 慎機論 渡邊華山撰
- 夢物語 高野長英撰
- 海防憶測 古賀洞庵撰
- 天保九年（一八三八） ○蠻社遭厄小記 高野長英撰
- 鳥哀音 高野長英撰
- 天保一二年（一八四〇） ○硝石丘を作る法並煉硝の法 高島秋帆著
- 火攻精選 名村元義譯
- 電擊銃略記 小山杉溪譯
- 粉砲考 吉雄常三著
- 海上砲術全集 天文臺譯員譯
- 天保一四年（一八四三） ○三兵活法 全篇十卷 和蘭海軍教官長カルテン著
- 三兵活法 全篇十卷 鈴木春山譯
- 弘化三年（一八四六）

○兵學小識 鈴木春山譯

○海上攻守略說 鈴木春山譯

○遠西砲術略 大冢同庵撰

○拔隊龍學校全書 大冢同庵撰

○砲術玉道真傳 小出長十郎撰

弘化四年 (一八四七) ○砲砲新編 藤井三郎譯

○煩礮用法 杉田成卿譯

○東西火攻辨 佐藤信淵著

○水陸戰法錄 佐藤信淵著

○三兵操治正義 箕作阮甫譯

嘉永元年 (一八四八) ○三兵操治正義 箕作阮甫譯

○鐵炮鉛彈經定法 佐藤信淵著

○鐵炮製作寸尺法 佐藤信淵著

○戰法錄抄 佐藤信淵著

○存華挫狄論 佐藤信淵著

嘉永二年 (一八四九) ○水蒸船說略 箕作阮甫譯

嘉永三年 (一八五〇) ○西洋砲術便覽 上田帶刀撰

○電擊銃略記 小山杉溪譯

嘉永四年 (一八五一) ○礮學圖編 佐久間修理撰

○砲術發揮 譯者不記

嘉永五年 (一八五二)

○海防火攻新覽

手塚律蔵譯

○西洋新流火術集

伊馬之介

○鈴林必携

上田亮章撰

○用礮軌範 砲臺篇

武田斐三郎譯

○礮卦

佐久間修理撰

○軍用火箭考

箕作阮甫・杉田成卿同譯

○煩泡射擲表

大冢同庵編

○海岸砲術備要

本木正榮譯

嘉永六年 (一八五三)

○遠西武器略説

市川齋宮撰

○泰西王氏銃譜

竹内東白譯

○煩炮發射表

大冢同庵撰

○軍制に付建白

高島秋帆

安政元年 (一八五四)

○銃創瑣言

大槻俊齋譯

○火攻採要

川勝求天譯

○遠西火攻精選撮要

淺野教徳編

○火技範

平歸一

○海岸戰話

相澤才助

○和蘭礮具圖説

結城頼省

○砲術訓蒙

杉田成卿譯

○築城新法

廣瀬元恭著

安政二年 (一八五五)

○遠西奇器述

川本幸民

○和蘭官軍歩操軌範

牧天穆

○歩兵運動軌範

石井修三

○砲藥新書

中井剛屏

○百幾撤私ベキザンス(人名)佛國砲書 小山杉溪

○國朝友砲煩權與録

國友若拙

○海上砲術全書

大野文庫刊

安政三年 (一八五六)

○三兵答古知幾

高野長英譯

○泰西兵鑑初篇

三宅友信譯

○鐵煩鑄鑑

金森建策譯

○砲家須知

長山樗園撰

○散兵用訣精論

越前藩士 西川貫藏譯

安政四年 (一八五七)

○三兵教練

石井修三

○新銃射法論

赤松清次郎

○改正練卒訓語

田中普譯

○銃軌範

里見大四郎譯

○觀銃式

平野後平

○礮兵操練全集

村田蔵六譯

○撤兵演式

島村鼎甫譯

○大砲使用軌範

寺地強平譯

安政五年 (一八五八)

○西説斥候 渡邊國太郎譯

○砲軍操法 村田蔵六譯

○迅發擊銃圖説 佐久間象山著

○生兵略解 步操袖珍 元岡舎主人述

○校正 步操袖珍 元岡舎主人述

○泰西兵語 小寺弘

○散兵定則 安場敬明譯

○築城新法 廣瀬元恭譯

○築城典刑 大鳥圭介譯

○砲科新論 大鳥圭介譯

○古氏兵論 石川遠譯

○臥榻兵話 大島積水

○慕氏兵論 曾田勇次郎譯

○銃戰紀談 長山樗圓撰

○硝石製煉法 櫻寧居士

○施條礮圖説 吉村賢次郎譯

元治元年 (一八六四)

○砲軍操法

○步兵心得

○步兵制律

川本清一譯

○築城典刑

慶應元年 (一八六五)

- 步兵練法 大鳥圭介譯
- 馬療新書
- 奧氏砲論 内藤類次郎
- 野戰要務 大鳥圭介譯

慶應二年 (一八六六)

- 格能弗答古知幾 木村宗三譯
- 步操新式 田辺種好譯
- 雷銃操法 福沢諭吉譯

慶應三年 (一八六七)

- 英國步兵練法 赤松小三郎譯
- 野戰兵囊 仙臺武庫刊 瀬脇節蔵譯
- 戰闘術門 長門兵學校 大村益次郎
- 佛蘭西答屈知幾 村上英俊
- 活兵要略 香山道太郎
- 三兵養生論 久我俊斉

稿を終わるにあたり、御指導、御校閲いただきました安齋実会長、所荘吉理事長に心から感謝申し上げます。

《参考文献》

- 一、赤松良則 『赤松良則半生談』 平凡社 昭和五二年
- 二、大久保利謙 『幕末の洋学』 吉川弘文館 昭和六一年
- 三、幕末の明治初期における西洋文明の導入に関する研究会編 『洋学事始』 文化書房博文社 一九九三年

四、佐野正巳 『国学と蘭学』

雄山閣 昭和四八年

五、宮地正人 『幕末維新期の文化と情報』

名著刊行会 一九九四年

六、大絲年夫 『幕末兵制改革史』

白楊社 昭和一四年

七、幕末維新学校研究会編

『幕末維新期における「学校」の組織化』

多賀出版 一九九六年

八、吉本真裏撰 『海舟先生水川清話』

大文館書店 昭和八年

九、文部省編 『日本教育史資料 七』

臨川書店 昭和四五年

図 1

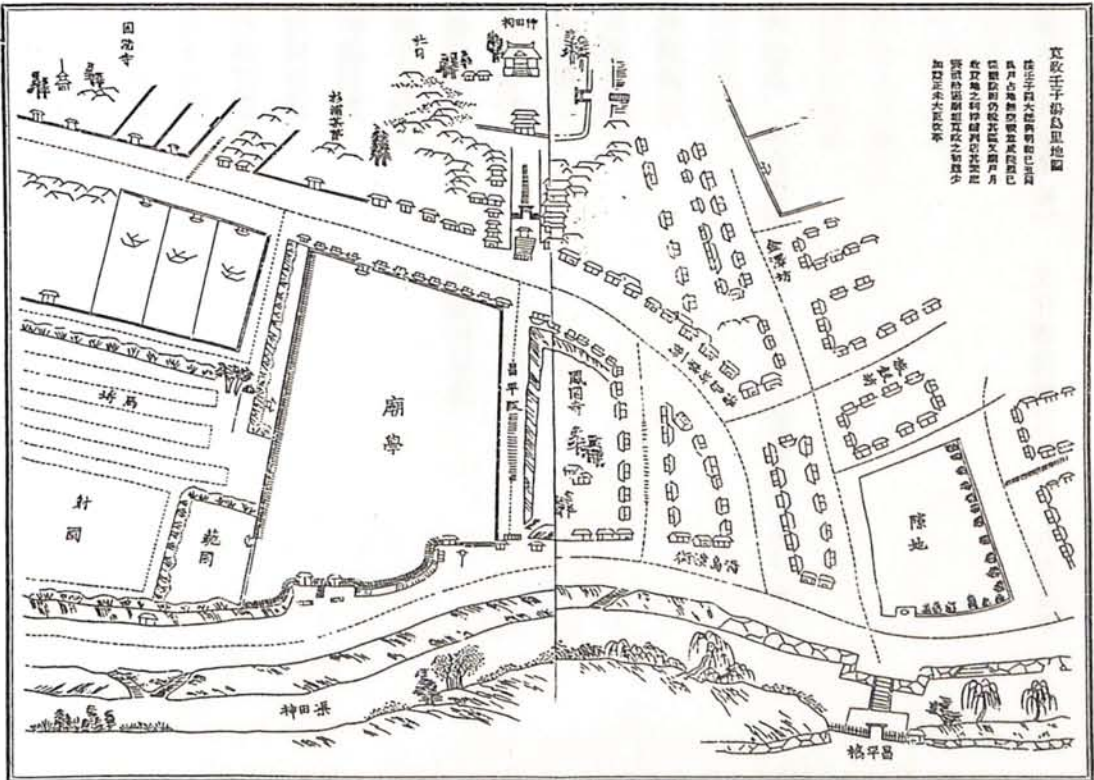


图 2

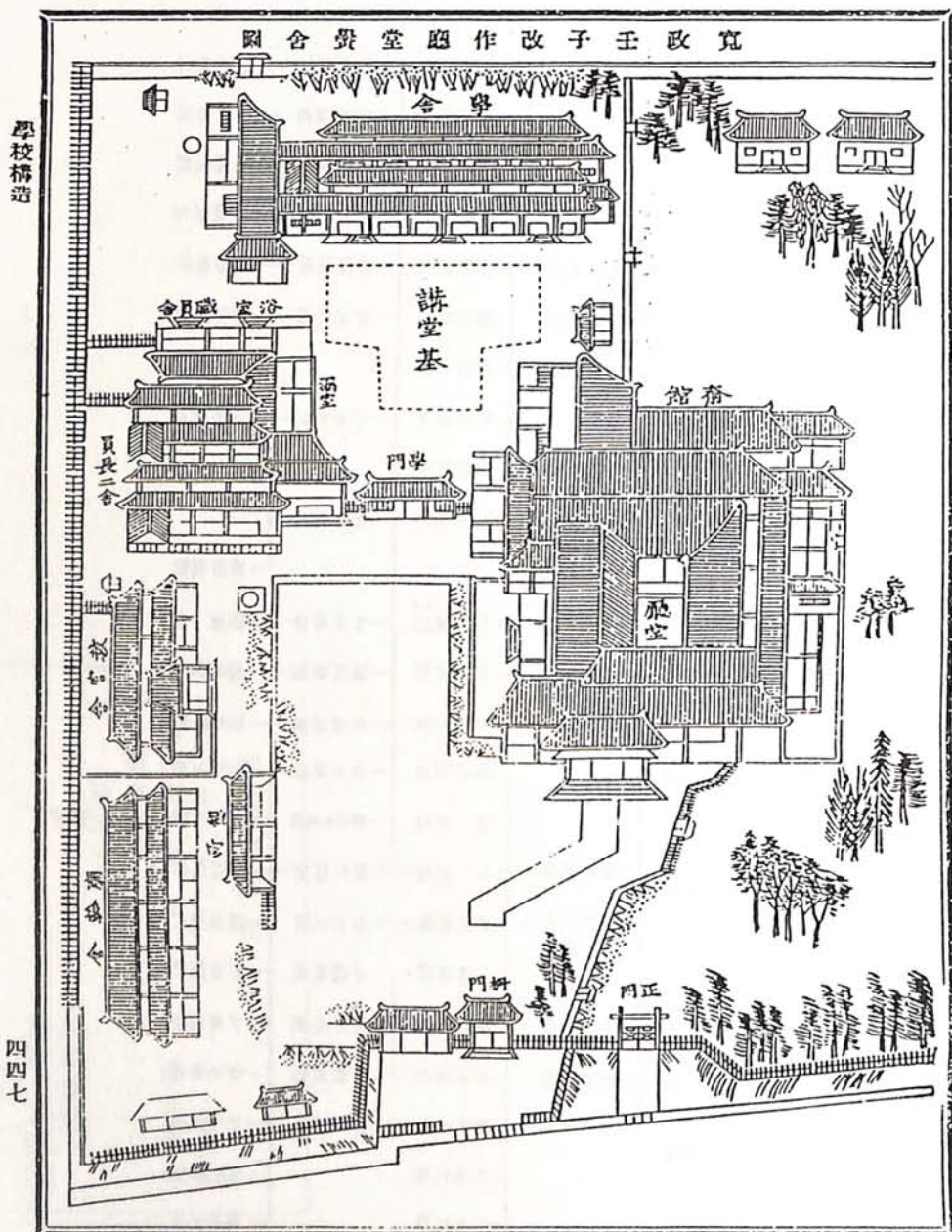
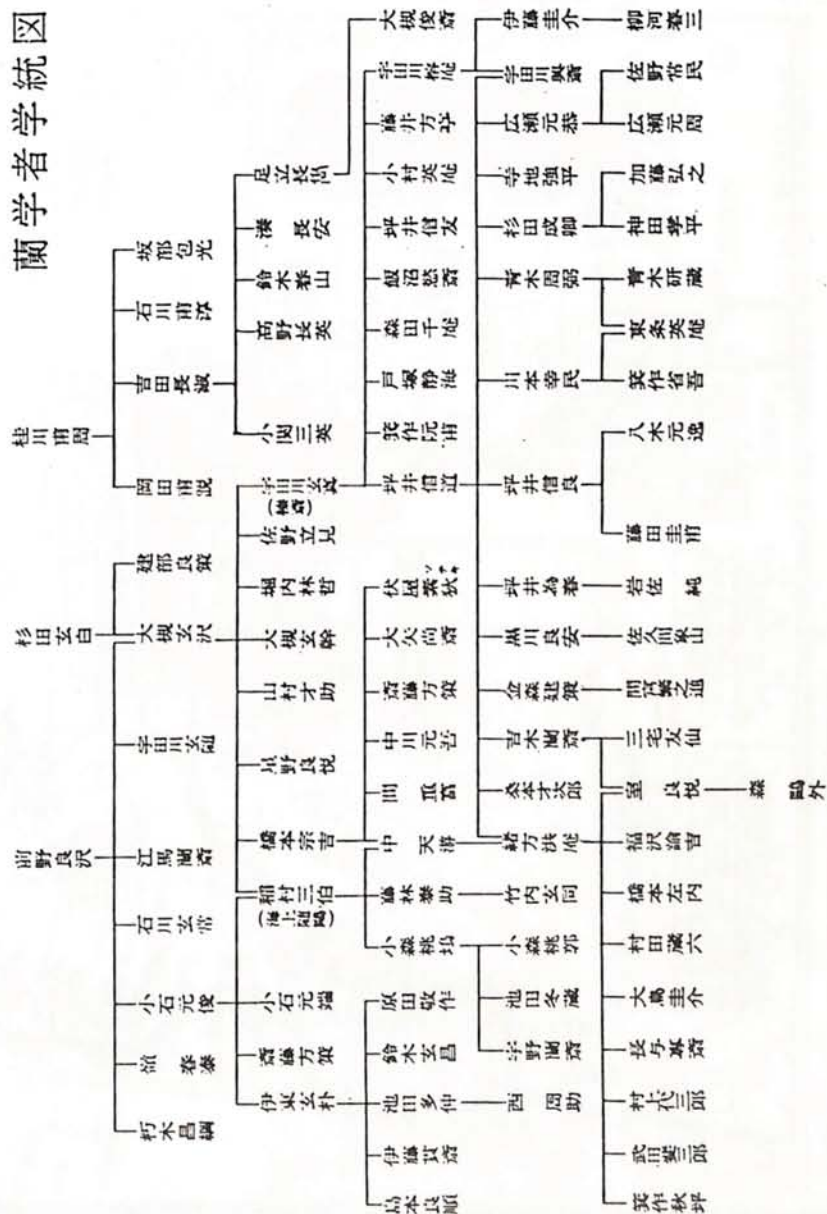


図 3

蘭学者学統図



銃砲史研究

平成八年六月八日

銃砲史学会

東京都渋谷区神南一ノ一

社団法人

日本ライフル射撃協会

頒価 五百円

編集発行